

氏名（本籍）	ヨシ 吉	ノ 野	タカ 貴	マサ 将	（埼玉県）
学位の種類	博士（美術）				
学位記番号	博美第224号				
学位授与年月日	平成20年3月25日				
学位論文等題目	〈作品〉森（cosmos） 〈論文〉“慈しみの象徴”一人の心を繋ぐ偶像を求めて				
論文等審査委員					
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	三田村	有純
（論文第1副査）	〃	〃	（大学美術館）	薩摩	雅登
（作品第1副査）	〃	〃	（美術学部）	増村	紀一郎
（副査）	〃	〃	（〃）	本郷	寛

（論文内容の要旨）

“慈しみの心”それは本来全ての人間に備わっている、人として最も大切な感性であり、大自然の摂理によって支えられている一人間として忘れてはならない偉大な思想でもあります。

私がチベットで出会った一匹の鶏。その瞳に宿る命の輝きは、人が本来大切にすべき“人としての心”の在り方を、私に諭してくれました。そこに抱いた情念を、偶像として表現し、その思いが観る人の心とつながる喜びを得た時、それは私に生きる意味をもたらす偉大な思想となったのです。

私は自身が万物に抱く心の情念を偶像に託したいのです。そして、物に溢れ想像力が失われつつある現代だからこそ、この感性の大切さを人々に伝えたいという思いがそこにはあります。私にとって偶像表現は、多くの人々の“慈しみの心”と繋がるための術であり、私から現代人へメッセージを伝えるための象徴的役割を果たすものなのです。そしてこの思いを叶えるための力を、私は“漆”という素材の神秘の中に捉えています。自然の営みが育む命の素材である漆は、自身の偶像表現における思いと観念的に共通する魅力を秘めているのです。

自らの人としての心の在り方を認識し、その情念の生み出す偶像が現代においていかなる存在に成りえるのか、その真の姿を、私は漆という素材と共に探っていきたいのです。本論文は、その“慈しみの象徴”としての偶像の姿を、以下の展開で考察していくものです。

第1章では、無意識の内に湧き出る自らの情念の根源を“心”の中に捉え、その人としての心の由来は何時、何処に始まるものなのかを私なりの観点で言及しています。

第2章では、原初の“人らしい心”が生み出した“象徴”とはいかなるものかを捉えています。そこに込められた意味やそれが担った役割など、その根本にある心の情念を想像しながら、私なりの観点で言及しています。

第3章では、“慈しみの象徴”としての偶像の在り方を問っています。何故“慈しみの心”がその根本を成し、何故その表現の媒体が偶像なのか。その言及に際し、私の感性に準ずる考察をしています。

第4章では、“慈しみの象徴”としての偶像の姿を、～森～（cosmos）の制作を通して考察し、自身の思い描く偶像を形成するための造形的構成要素を捉えています。

第5章では、“慈しみの象徴”としての偶像表現に絶対不可欠な、漆という素材のもつ、神秘的な魅力とは一体何かを私なりの観点で捉え、その表現の可能性を示しています。

終章では、“自身の描く偶像の未来像”を想像することで、本論考のまとめとしています。